

中世後期の松尾社祠官について（野村朋弘）

報告要旨

洛西に鎮座する松尾大社は賀茂社とならび、皇城镇護の社として「賀茂の厳神、松尾の猛霊」となれば証された。両社とも『延喜式』神名帳で名神大社列格を有している。以降、松尾社は国家祈祷を行う二十二社の一つとして、朝廷及び歴代の幕府から崇敬を受けており、古代から近代まで豊富な史料を有している。また、松尾社には代々社家を勤めていた東家・南家がいる。明治維新後に神社から離れたものの所有していた史料の多くは松尾社へ寄贈され『松尾大社史料集』として刊行されており、研究の便がはかられている。しかしながら中世の松尾社の研究は多くはない。特に中世後期においては戦乱によって社領は退転し、神事を延期・中止せざるを得ない状況下となっている。その中で歴代の祠官となった社家の人々は、神事を維持すべく神社近隣の社領経営のため苦心する。

私は2019年度から東京大学史料編纂所の共同研究「松尾大社所蔵史料の調査・研究」として原本調査を行っている。この研究成果も盛り込みながら、祠官がどのように社領を維持し、神事が行われてきたのか。現存する史料から明らかにしたい。